

RESEARCH CENTER FOR THE FUTURE CITY DESIGN  
CORRESPONDING TO GLOBAL ENVIRONMENT PROBLEMS  
RESEARCH GROUP FOR THE FUTURE CITY DESIGN  
CORRESPONDING TO GLOBAL ENVIRONMENT PROBLEMS  
<http://future-cities.ynu.ac.jp>

【講演資料】 未来都市再生研究

都市デザイン研究部会長  
横浜国立大学都市イノベーション研究院教授  
北山 恒 氏

// 第2回地球環境未来都市シンポジウム(活動報告とパネルディスカッション)//

地球環境未来都市(横浜・都留)へ向け～ICTプラットフォームを活用して～

# 都市をリ・デザインする

2013年6月15日(土) | 13:00 → 17:00 | 参加無料

横浜国立大学教育文化ホール

## 1. さまざまな都市構想

図 1 は、今から半世紀以上前に丹下健三が作った東京の未来計画です。現代の眼で見ると冗長性がなく、災害に弱いと思われます。オフィス街と住居を完全に分けて高速道路でつないでいるだけで単純なダイアグラムのように見えてしまいます。が、東京湾の地盤の上に巨大な構築物を作るという革新的なアイデアでした。

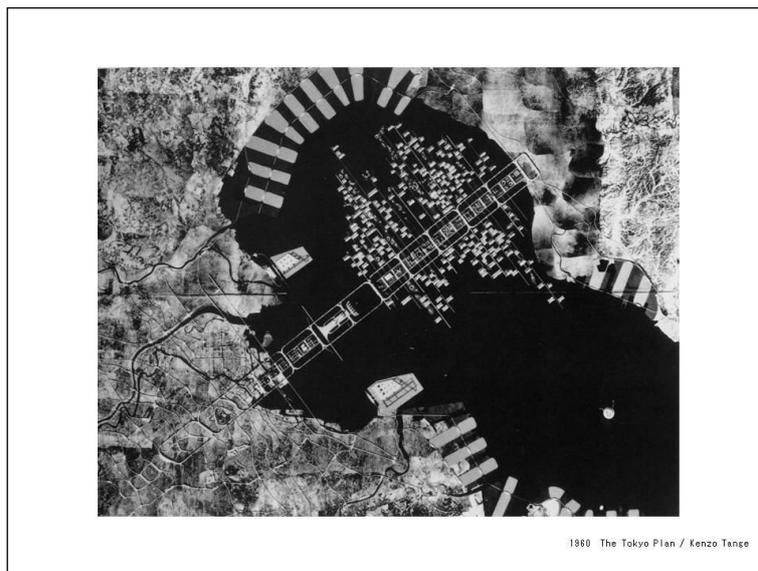


図 1

菊竹清訓は、1963年に海上都市を考案しました。まだタワーマンションがないころ、都市が膨張し、社会が拡張していく中で、高層の建物を造ることを考えていたわけですが、「みなとみらい」もこのようなイメージで都市ができつつあります。

黒川紀章が設計した中銀カプセルタワービルは、中に住む人がカプセルのユニットごと取り換えられるというものです。このように、都市の部品になるということを真剣に考えていた時代が半世紀前にはありました。つまり、社会の思想で都市がつくられるということです。

パリについては、オスマンというパリの行政官が1852年に都市構想をスタートして、わずか28年でつくられています。これは非常に単純で、オスマン・ファサードという同じ立面を持った部品で、都市が構成されています。権力が集中していない限りつくることができない都市で、反乱軍を鎮圧するために星型の道路を配するというプランでした。これが今では一つの都市パターンとして成功を収めています。

ニューヨークの都市は、20世紀初頭に20年ほどで完成しています。このように都市は人間のライフスパンに対応するだけでできてしまうわけです。ニューヨークは基盤の目になっており、大きなオフィスビルをセンターコア方式で立ち上げるのにちょうどいい形でつくられています。パリが大きな権力でつくられた都市だとすれば、ニューヨークは資本主義というシステムによってつくられた都市です。ニューヨークは自由競争によって都市の中をつくっており、20世紀の産業都市のモデルができています。

上海は、中国共産党政府という巨大な権力が構想する未来都市です。ドバイも、オイルマネーというマーケットがつくる都市です。こうしたものが本当に私たちの未来都市として想定されているのかどうかというところから始めなければいけないと思います。

## 2. 破壊と更新の都市・東京

私たちの都市は絶えず生成変化しています。日本の建物の寿命は26年です。東京23区内の土地所有者は120万人おり、その120万人の意思が東京をつくっているという意味では、単純に権力がつくる都市ではない、新しい都市風景が始まっています。

図2は、紫色が関東大震災で焼けたところ、黄色が東京大空襲で消失した部分、その周りの赤色は、生産緑地が乱開発されてできた木造密集市街地です。東京は、関東大震災と東京大空襲で破壊され、高度成長期に大きく都市改変がなされました。絶えず破壊行為が繰り返され、どんどん更新されている都市であるということです。

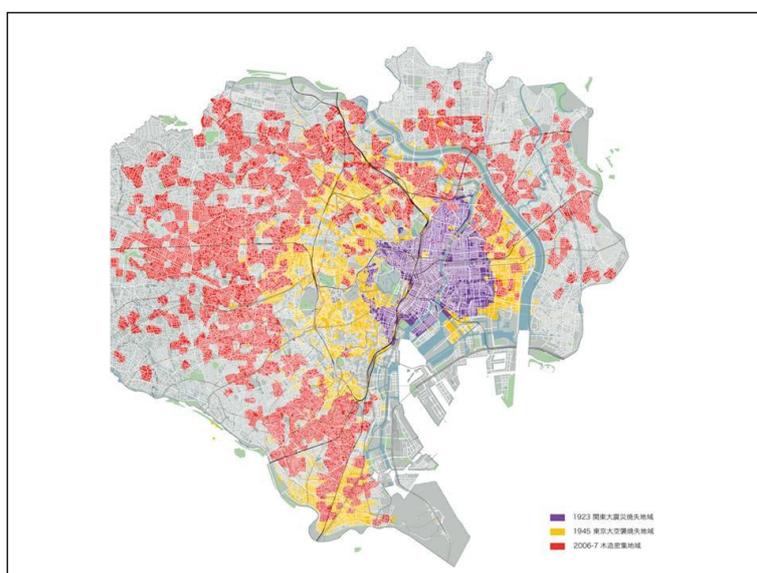


図 2

私たちは、UIA(国際建築家連合)の東京大会で「Co-Housing」というアイデアを出しました。東京の木造密集市街地の中には、現行法規に適合していない不適格宅地が約4000haあります。東京の中心部に大きなタワーやオフィスビルがあるところを都市といいます。本当の都市の主役は住宅です。そこが何の手当てもされないまま放置されているのです。建物寿命が26年である中で、その改変を誘導していくような計画を作ってみてはどうかということで考えたのが、「路地核」というアイデアです。コミュニティを支える防災用の装置や、コージェネ等の施設を備えたタワー状の建物を建て、この小さなインフラのような「路地核」に多様なユニットを接続することで、集合住宅のような「Co-Housing」が生まれるということを提案しています。

## 3. ICTプラットフォームと新しい未来都市イメージ

現在、日本には空き家が約14%、単身家族が約4割あります。ある意味では住宅が壊れはじめ、家族も壊れはじめています。住宅が家族に対応するものではなくなってしまった中で、どのように街をつくっていく

か。舗装されている道を、車のためではなく、人間のための道へと変えていくことができないか。それは大きな権力がつく都市ではなく、民主的につくっていく都市になります。

そういう新しい都市イメージができるはずなのですが、かつてそれができなかったのは情報がコントロールできなかったからです。そこに統合的な ICT プラットフォームがあれば、街にはどのような人がどのように住んでいて、どのような問題があるのか、コミュニティのための施設がどこに必要なのかということも計画できるでしょう。そうすると、これまでの未来都市のイメージとは全く違う方向の、新たな未来都市イメージがつかれるのではないかと思っています。

多様な交通手段が用意され、道路も車のためだけではない、多様な道に変換する可能性があります。エネルギーのサポートも、小さなエネルギーのステーションがネットワークしていくようなものになると思います。都市計画が今までとは違う領域に飛び込む可能性があるという意味で、統合 ICT プラットフォームによる未来都市構想により、今まで私たちが体験しなかった世界が生まれるかもしれません。

#### 4. 横浜市と連携した環境未来都市研究

私たちは「都心臨海部・インナーハーバー整備構想」に参画していますが、情報操作によって、上海やドバイとは全く違う新しい居住都市、未来都市をつくる可能性があると思います(図3)。それには、情報を読み取りテラシーのシステムと、それをどうデザインするかというやりとりの方法を開発する必要があるので、今後はそれに取り組んでいくのだろうと思っています。



図 3